

身近な体験を通して気づく...

筆者は、若い頃に左腕を切断され、右腕で仕事や車の運転など、何の不自由も感じさせず（私にはそう見えましたが）日々、仕事に励んでおられた隆夫さん（仮名）と出会いました。

魚釣りで学んだこと

隆夫さんは、釣りが好きでいっしょによく出かけました。左手は作業用義手で、ほとんど、右手だけで竿（さざ）にリールをつけ、糸を通し、ハリをつけて準備をされます。

私が、早く準備ができ「手伝いましょう」と手を出そうとすると「よが、よが、早く釣りなせ、すぐ追いつくけん」とやんわりとことわられ、私が2・3匹釣り上げたころ、「さあーできた」と、右手で器用にエサをつけ、楽しそうに釣り始められました。

ある時、船で沖に出ました。船釣りは、板にまいた糸をたらしての一本釣りです。エサをつけ、海底に落とし、「ア

タリ」があれば、糸を手でたぐり上げなくてはなりません。隆夫さんが船釣りに、あまり乗り気でなかったのが、その時初めてわかり「しまった」という気持ちになりました。

右手だけで、糸を引き上げるのは大変なことだったので、隆夫さんといっしょに行って初めてそのことに気がつきました。

また、ある時、隆夫さんの糸がからまってしまい、しばらく自分でやっておられましたが、「手伝いましょう」と言う「すまんー」と恐縮され、糸をほぐして渡すと、「すまんすまん」と申し訳なさそうにしておられました。

両手であれば簡単なことが、片方の手だけでは思うようにはならないのです。

海岸や堤防から釣るより、船で沖に出た方がより大物が釣れるという気持ちだけで、隆夫さんの気持ちをまったく汲むことができず、船釣りに誘い、隆夫さんの大変さがわかったのです。

最初、私は、隆夫さんに対して「してやるう」「たすけてやらなくては」という強い気持ちがありました。障がいを持った人への偏見であり、親切の押しつけであり、かえって迷惑だったことと思います。

隆夫さんと釣りを楽しおなかで、色々なことを体験し、大事なことを学ぶことが出来たように思います。

普段は気づかなかつたことが、隆夫さんと出会って、自分自身の人権感覚を見直すことができました。

親切の押しつけでなく、困っている人に対して、今、何をすべきか、気づき・考え・行動することで「人権感覚」も身に付けてくるものではないでしょうか。

この益城町でも、人権が大切にされていると実感できる「人権の町づくり」の取り組みが、さらに広がるよう「人権感覚」を磨いていきましょう。

益城町教育委員会

ふるまの地名遷歩

歴史の変遷と地名

322

矢嶋姉妹の周辺⑦ 六 横井家

◇家祖は「中先代の乱」(1335)に敗れ斬られた北条高時の次男時行で、その子時満は尾張に隠れ、三代目の時永が横井を名乗る。横井家は北条氏の後裔。

◇時満から五代目時延の四男時久の甥時次は寛永6年(1629)に細川忠利に仕え、寛永9年(1632)忠利に従い肥後に移る。時次の次男時国から四代を経て横井小楠に到る。

◇小楠は禄高150石の父時直、母貞(かず)の次男として、文化6年(1809)内坪井横井家に生まれ、のち兄時明の死により時明の遺児が幼いため準養子として家督を継いだ。

このような矢嶋姉妹を囲む六家の特徴の幾つかの内の一つは全てが婚姻関係であることである。

◇まず、直明の妻鶴子は三村氏で、直明は三村氏の長男章太郎とは義兄弟の仲である。章太郎の長男伝之助は、直方の従兄弟で、同時に直方の姉にほ子の夫である。

◇三女順子は竹崎律次郎の妻。

大江女学校(現熊本フエイヌ学院高等学校)設立。校長校母として仰がれる。

◇四女久子は徳富一敬の妻。徳富猪一郎(蘇峰)・健次郎(蘆花)の母。

◇五女つせ子は横井小楠の妻。長男時雄(同志社社長)。長女みや子(海老名弾正妻)。

◇六女楯子は林七郎の妻。日本キリスト教婦人矯風会会長。

◇七女貞子は河瀬典次の妻。

これらはすべて鶴子の娘婿であり、直明の義兄弟になる。この内順子から楯子までが矢嶋四姉妹として世に知られる。第二にこの一族は、先祖が武士の出自で、幕末から肥後南部を地盤とした一領一匹身分の惣庄屋の家格であった。

益城町文化財を訪ねる会
会長 松野國策



横井小楠の生家「四時軒」

※写真提供 熊本市教育委員会文化財課